令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

美術館のアクセシビリティ向上推進事業

報告書

目次

1. 事業概要 …… 2
2. 「美術にアクセス! ——多感覚鑑賞のすすめ」展 … 3
   (1) 展覧会概要 …… 3
   (2) ディスプレイ …… 5
   (3) 来館者 …… 9
   寄稿
   「軽やかであるために重くあること」小田久美子 … 10
   (4) 関連プログラム …… 12
3. 利用者・未利用者調査 …… 16
4. プログラムの記録動画公開 …… 17
5. 認知症のある人のためのプログラム検討 …… 18
6. 多様な作品解説の展開 …… 18
むすびにかえて …… 19

このコードは文字情報をおさめた「音声コード」です。読み取りには専用アプリ「Uni-Voice」または「Uni-Voice Blind」のダウンロードが必要です。

1. 事業概要

(1) 趣旨

三重県立美術館は「誰もが利用しやすい環境」を整えることを活動指針のひとつに定めている(「三重県立美術館のめざすこと」2018年策定)。利用機会の公平性の担保は、多くのミュージアムが使命に掲げる一方、一人ひとりと真摯に向き合い「すべての人」を包摂することは、決して容易に達成できる目標ではない。この「美術館のアクセシビリティ向上推進事業(以下、アクセシビリティ事業)」の目的は、美術館を利用しづらい人との協働を経て、美術館のアクセシビリティ(=利用しやすさ)を向上させること。事業の柱となっているのは、美術館を利用しづらい人のニーズに応えると、その他の人、ひいては「すべての人」の潜在的ニーズにも応えられるという基本的な考え方である。事業立ち上げから2年目となる2021年度は、所蔵品のアクセシブルな展示を試みた展覧会を開催し、展示室に掲出する解説の検討や、講演のアーカイブ映像の公開にも取り組んだ。

(2) 実行委員会構成

三重県立美術館(中核館)
公益財団法人三重県文化振興事業団　三重県子ども・福祉部障がい福祉課　三重県立美術館ボランティア「欅の会」

(3) これまでの歩み(特別支援学校や障がいのある人、関連団体との連携実績)

2015年度　「アートでつなぐ・三重の文化創造事業」より「芸術活動による障がい者の自立支援事業」
文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
連携校:三重県立くわな特別支援学校、三重県立特別支援学校伊賀つばさ学園
デザイナー:水川史生(en design studio)
美術館の所蔵作品を鑑賞して制作した作品をもとに、デザイナーが製品見本(Tシャツ)を制作

2016年度　「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」
文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
連携校:三重県立特別支援学校西日野にじ学園、三重県立特別支援学校玉城わかば学園
アーティスト:松岡徹
作家によるワークショップ@学校、美術館の所蔵品展示@学校、ワークショップ成果展示@美術館

2017年度　「アートでつなぐ・新しい鑑賞体験創造事業」より「鑑賞ツール開発プロジェクト」
文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
連携校:三重県立城山特別支援学校
デザイナー:楠木一徳(KUSUKI DESIGN)
特別支援学校の協力を得て、デザイナーと美術館所蔵品の鑑賞支援教材「あいうえおブロック」と「キューブパズル」を開発
(5-6ページ参照)

2020年度　「美術館のアクセシビリティ向上推進事業」(継続中)
文化庁「地域と共働した博物館創造活動支援事業」
協力:三重県視覚障害者支援センター、三重県自閉症協会　等
目の見えない/見えにくい人向けの鑑賞プログラムの企画運営や「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」の開発

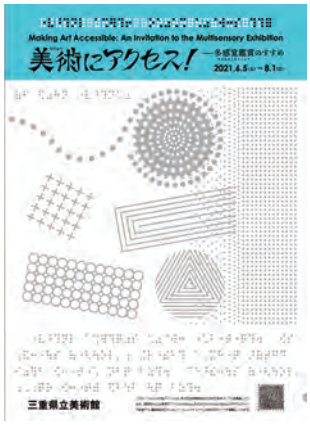
2.「美術にアクセス!――多感覚鑑賞のすすめ」展

(1) 展覧会概要

■基本情報

会期:2021年6月5日(土)−8月1日(日) 開催日数50日
会場:三重県立美術館企画展示室1−4室、エントランスホール
主催:三重県立美術館
助成:公益財団法人三重県立美術館協力会
令和3年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業
三重とこわか国体・三重とこわか大会文化プログラム事業
入場者数:3,449名 1日平均約69名 障害者手帳等利用者165名(約4.8%)
担当:鈴村麻里子、髙曽由子、内藤由華(三重県立美術館学芸普及課/以下、所属記載のない担当者は同課所属)

展覧会ポスター



会場配布リーフレット表紙

広報宣材・配布印刷物デザイン:桑田知明 タイトルロゴ:楠麻耶

■趣旨

視覚だけでなく触覚や聴覚を活用したり、想像力を駆使してさまざまな感覚を連関させたりしながら、来館者が障がいの有無にかかわらず能動的に美術鑑賞することを提案する展覧会(以下、アクセス展と略)。三重県立美術館が所蔵する絵画、彫刻、版画等に加え、それらの鑑賞を支援する教材等約50点を展示した。

展覧会タイトルの「アクセス」という語には、誰もが利用する権利や機会を得るという従来の意味に加えて、利用者が自らすすんで美術に関わるという期待も託した。視覚という感覚の特性上、視覚のみに頼る美術鑑賞は受動的な経験になりやすい。この展覧会ではその課題の一つの解決策として、障がいのある人向けの鑑賞プログラムにおいて重視される「多感覚の」鑑賞を提案した。とりわけ、触覚の持つ能動性を喚起する力に着目し、触覚を活用した鑑賞機会の担保に努めた。5ページ以降で示す通り、会場ディスプレイは、障がいのある当事者による助言や、国内外のアクセシブルな展示の先例、米国スミソニアン協会のアクセスしやすい展示デザインのガイドライン*を参考にしながら設計した。

キーワード:アクセシブル、ユニバーサル、インクルーシブ、能動性、マルチセンサリー(多感覚の)、触察、ハンズオン、障がい、特別支援学校、展示補助教材

*Smithsonian, “Smithsonian Guidelines for Accessible Exhibition Design,” n.d.(2010)
https://www.sifacilities.si.edu/sites/default/files/Files/Accessibility/accessible-exhibition-design1.pdf

■章構成

序章「鑑賞の前に」
2020年度のアクセシビリティ事業で実施したプログラムや開発した教材の紹介
第1章「鑑賞するために」
これまで当館で開発した鑑賞支援教材を、対応する所蔵品2点とともに展示
第2章「美術と感覚」
視覚以外の感覚を喚起する作品や、感覚に関わりの深い作品を紹介
第3章「彫刻にさわる」
柳原義達、佐藤忠良、舟越保武の彫刻作品7点の触察が可能な展示 *うち2点の触察は日時限定
第4章「オノマトペと共感覚」
独立した感覚ではなく、統合された感覚に根差すような元永定正の抽象絵画8点を展示

■主なメディア掲載

寺岡葵「五感で鑑賞いかが 県立美術館 障害者向けの作品やガイド紹介」『中日新聞』(三重版)2021年7月9日付
谷口大河「触れて豊かな芸術鑑賞 感染対策と並行、展示に工夫」『中日新聞』2021年7月10日付
趙宜恬「藝術近用―多感官欣賞的激請 三重縣立美術館的文化近用計畫」『藝術家』557号、2021年10月、320−327頁(繁体中文)
「作品や教材を“さわる”“聴く”三重県立美術館で多感覚観賞」(CBCテレビ「チャント!」内「よしお兄さんのもっとパパにみえてきましたね」)2021年7月14日

■参考

三重県立美術館「『美術にアクセス!――多感覚鑑賞のすすめ』展詳細ページ」
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000250135.htm

同「『美術にアクセス!――多感覚鑑賞のすすめ』展 会場配布リーフレット オンライン版」
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000249533.htm

■会場風景

第1章

第2章

第3章

第4章

■出品リスト

作者名	作品名	制作年	材料
第1章　鑑賞するために			
バルトロメ・エステバン・ムリーリョ	アレクサンドリアの聖カタリナ	c. 1645-50	油彩・キャンバス
佐 伯　祐 三	サンタンヌ教会	1928（昭和3）	油彩・キャンバス
第２章　美術と感覚			
中 澤　弘 光	美人と感覚（絵葉書セット）	1905（明治 38）	木版・紙
向 井　良 吉	発掘した言葉	1958（昭和 33）	ブロンズ
駒 井　哲 郎	束の間の幻影	1951（昭和 26）	エッチング、アクアチント・紙
ヴァシリー・カンディンスキー	『小さな世界』よりⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ	1922	リトグラフ、木版・紙
木 村　荘 八	戯画ダンスホール	1930（昭和 5）	油彩・キャンバス
松 本　竣 介	街	1946（昭和 21）	インク・紙
	駅の裏	1942（昭和 17）	油彩・キャンバス
フランシスコ・デ・ゴヤ・イ・ルシエンテス	『戦争の惨禍』より「戦争の惨害（30）」	1810-20	エッチング、ドライポイント等・紙
	『戦争の惨禍』より「これは何の騒ぎだ？（65）」	1810-20	エッチング、ラヴィ等・紙
	『妄』より「滑稽の妄（3）」	1815-24　　出版：1930	エッチング、アクアチント等・紙
	『妄』より「葬いの妄（18）」	1815-24　　出版：1930	エッチング、アクアチント等・紙
橋 本 平 八	弱法師	1934（昭和 9）	木
オディロン・ルドン	『ヨハネ黙示録』より「御使、香炉を手に持って、(4)」	1899	リトグラフ・紙
	『ヨハネ黙示録』より「するとたいまつのように燃えている大きな星が、空から落ちてきた。(5)」	1899	リトグラフ・紙
川 村　清 雄	梅と椿の静物	制作年不詳〔1929（昭和 4）以前〕	油彩・絹
黒 田　清 輝	薔薇の花	大正期	油彩・板
中 谷　泰	烏賊のある静物	1950（昭和 25）	油彩・キャンバス
清 水　登 之	チャプスイ店にて	1921（大正 10）	油彩・キャンバス
長 原　孝 太 郎	焼芋屋	制作年不詳	水彩、インク・紙
	牛肉屋の二階	1892（明治 25）	水彩・紙
ウィリアム・ブレイク	『ヨブ記』より「第６図：腫物でヨブを撃つサタン」	1825	エングレーヴィング・紙
ナティビダー・ナバローン	私のからだ：鎮痛と恐れ（パートⅢ） あなたが私をかばう時、私は安心して休む	1997	ベルベット、鉄、紐
第３章　彫刻にさわる			
柳 原　義 達	猫	c. 1963（昭和 38）	ブロンズ
	猫	1964（昭和 39）	ブロンズ
	座る女	1958（昭和 33）	ブロンズ
	しゃがむ女	1958（昭和 33）	ブロンズ
	鳩	1960 年代	ブロンズ
佐 藤　忠 良	群馬の人	1952（昭和 27）	ブロンズ
舟 越　保 武	OHNO 嬢	1982（昭和 57）	ブロンズ
第４章　オノマトペと共感覚			
元 永　定 正	作品	1956（昭和 31）	油彩・キャンバス
	Piron Piron	1975（昭和 50）	アクリル・キャンバス
	作品 funny 79	1967（昭和 42）	アクリル・キャンバス
	O.-O.-O	1971（昭和 46）	アクリル・キャンバス
	Nyu Nyu Nyu Nyu	1971（昭和 46）	混合技法・キャンバス
	せんせん	1979（昭和 54）	アクリル・キャンバス
	かたちちちち	1990（平成 2）	アクリル・キャンバス
	せんがおおゆれ	1987（昭和 62）	アクリル・キャンバス

（2）ディスプレイ

会場ディスプレイについては、地域の当事者の助言に加え、他館のアクセシブルな展示の先行事例を参照した。最も影響を受けたのは、國立台湾美術館（台中市）で開催されていた「家・屋」展（2019−20年）。同展の会場風景はGoogle Arts & Cultureでも見ることができる。コロナ禍下のさわれる作品や触図の展示方法については、愛媛県美術館の「みる冒険」展（2021年）やKYOTOGRAPHIE（京都国際写真祭）における「マリー・リエス　二つの世界を繋ぐ橋の物語」展（2020年、アトリエみつしま Sawa-Tadori）等から多くの示唆を得ている。なお、作品数点をのぞくすべての展示物は来館者も撮影可能であったため、来館者が撮影した会場風景写真もインターネットやSNS上で閲覧できる。

以下、会場に設置したディスプレイや鑑賞支援教材について項目別に紹介する。特記のない限り「来館者より」は来館者アンケートからの、「監視スタッフより」はスタッフアンケートからの抜粋。

■触地図

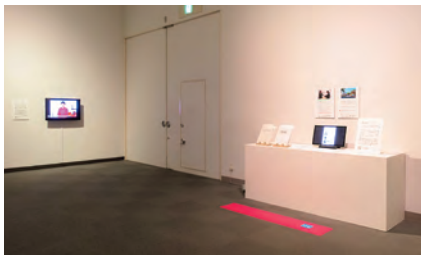
デザイン・制作：道田健（大阪芸術大学准教授／プロダクトデザイナー）

2020年度に、三重県視覚障害者支援センター利用者の目の見えない／見えにくい人を対象に美術館での鑑賞会を2回実施した。1回目には、参加者が途中で方角が分からなくなるハプニングが発生。「さわれる地図のようなものがあっても良いかもしれない」という助言に基づき、2回目の鑑賞会では触地図の試作品を展示室入口に設置し、デザイナー同席のもと、ユーザーテストを行った。この時はすべての展示室の情報を1枚の地図に収めたが、一度に把握できる情報量には限界がある。「部屋ごとに触地図を置いては」という参加者からの提案には、スタッフ一同はっとさせられた。結果的に、アクセス展の会場には1番目の展示室に大きな触地図を1枚、2番目以降の展示室には各部屋の触地図を1枚ずつ（計4枚）設置。「目の見えない人と一緒に来館した目の見える人が、すぐにさわれる地図だと気づけることも重要」、「落ち着いてゆっくりさわれる場所に地図が設置してあるとさわりやすい」という意見も踏まえてデザインや設置場所を検討した。

【目の見えない／見えにくい人と一緒に来館した、複数の晴眼者（＝目の見える人）より】
「案内がしやすかった。」
【監視スタッフより】
「次の展示の時は設置されますか?と質問されました。」
【参考】
三重県立美術館「『美術館のアクセシビリティ向上推進事業』2020年度報告ページ」
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000247807.htm

■「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」

制作協力：三重県自閉症協会



右手がソーシャル・ガイド展示コーナー

はじめての場所に足を運ぶことや、人とのコミュニケーションに不安を覚えやすい自閉スペクトラム症の人を主な対象に想定し、三重県自閉症協会の協力を得て2020年度に開発した来館支援教材。当館のウェブサイトで公開している。今回の展示では、当初、台の上にソーシャル・ガイドを綴じたファイル（点字シール貼付）、および自閉症協会の方々からのアドバイスが書き込まれた、開発のプロセスが分かる校正紙のファイルを置いていた。会期序盤にファイルを手に取る人の少なさが気になったため、より多くの人にガイドを見てもらえるよう、会期途中からモニターを設置し、内容をスライドショーで提示した。

【来館者より】
「私自身が自閉症スペクトラム当事者であり、試みの意味を深く考えさせられた。」（ソーシャル・ガイドを含む、展示全体に関する感想）
「バリアフリーガイドの作り方まで展示されていたのが面白かった。」
【参考】
三重県立美術館「三重県立美術館ソーシャル・ガイド」（案内ページ）
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000248624.htm
鈴村麻里子「来館しやすいミュージアムへ――『三重県立美術館ソーシャル・ガイド』の開発過程」
『HILL WIND（三重県立美術館ニュース）』49号、2021年7月、3−4頁

■鑑賞支援教材「あいうえおブロック」と「キューブパズル」

デザイン・制作：楠木一徳（KUSUKI DESIGN）
協力：三重県立城山特別支援学校高等部

2017年度に城山特別支援学校高等部の生徒6名や先生の協力を得て、プロダクトデザイナーの楠木氏と美術館が協働して開発した

所蔵品の鑑賞支援教材。「あいうえおブロック」がバルトロメ・エステバン・ムリーリョ《アレクサンドリアの聖カタリナ》に、「キューブパズル」が佐伯祐三《サンタンヌ教会》にそれぞれ対応している。「あいうえおブロック」は、表にひらがなや記号が、裏にその文字から始まる鑑賞のヒントや生徒のコメント等が書かれたブロック。表面を上にして言葉や文を作って他の来館者と共有することもできる。「キューブパズル」は《サンタンヌ教会》の複製図版を12ピースに分割したパズル。キューブ状のピースを回すと、他の面に掲載された生徒のコメント等を読むことができる。2017年度の開発当時は、参加生徒が全員晴眼者だったということもあり点訳はしていなかったが、今回アクセス展で再展示するにあたり、いくつかのブロックやキューブには点字シールを貼った。また、2018年の展示時には来館者がコメントを書き込んだ付箋を順次キューブに貼っていたが、今回は感染防止のため、書き込みは中止した。

「あいうえおブロック」

「キューブパズル」

【来館者より】
「『あいうえおブロック』や『キューブパズル』などの体験によって、絵画を楽しんで鑑賞することができた。」
【監視スタッフより】
「熱心に、楽しそうに、会話しながら、されていました。」
「キューブパズルは、大人も子供も夢中になる方が多かったです。」
【参考】
アートでつなぐ・新しい鑑賞活動創造事業実行委員会「アートでつなぐ・新しい鑑賞活動創造事業記録集」2018年（PDF版）
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/common/content/000782309.pdf

■音声再生装置

会場には入口も含めて、この水色の音声ボックスを計8台設置した。この装置の上の壁に掲示された解説の原稿に少し変更を加えて読み上げ、館内で録音・編集を行った。一人で来場した目の見えない／見えにくい人や、印刷された文字を読みづらい学習障がいのある人等の利用を想定した、解説の音訳である。内容は配布リーフレットの掲載文とも重複するが、会場パネルの方がより詳しい説明となっている。

再生方法はさわる方法とさわらない方法の二通り。さわる方法については、目の見えない人も再生や停止の操作がしやすいシンプルな動作を追及。ボックスの中にはmp3形式の音声ファイルを記憶させた簡易的な基盤があり、スピーカーとボックス天板のスイッチにコードがつながっている。今回の展示ではスイッチに指を触れると再生／停止の信号が伝わるように感度を調整した。コロナ禍であるため、非接触の再生方法も担保した。スイッチの天板にはQRコードが掲示されており、来場者自身のデバイスを使って読み取ると、ウェブサイト上で音声の再生、停止を行える仕組み。使い捨てイヤホンも用意したが、イヤホンジャック端子のない一部のデバイスでは使用できなかった。なお、この展覧会ではデバイスの貸出は行っていない。

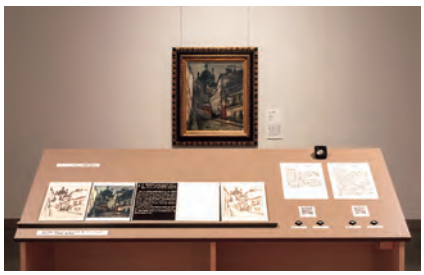
【来館者より】
「解説を聞かせるという試みは大賛成。［略］普通の展覧会でも音による解説がほしい。」
「欲を言えば、音声ガイダンスを全ての人がイヤホン対応だったら嬉しかったかも。他の方がガイダンスを流している間は作品鑑賞が全くできないので。（集中できなくなってしまう。）」
（感覚過敏や自閉スペクトラム症、注意欠陥・多動症の傾向あり、と書いてくださった方）
【監視スタッフより】
「誰かが押して始まった解説を聞きながら、何人かの人は鑑賞していました。」
「最初の解説は音声で聞かれる人が多いですが、後の方は読んで済まされる方が多かったです。」
【参考】
三重県立美術館「『美術にアクセス!』展音声解説00　ごあいさつ」（音声解説の例）
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000250979.htm

■立体コピー等

鑑賞支援教材が数多く開発されている所蔵品《アレクサンドリアの聖カタリナ》と《サンタンヌ教会》の前に斜台を設置し、2003年度に盲学校の教員の協力を得て作成したカプセルペーパーの立体コピー2枚、作品の複製図版、墨字（＝点字に対し、印刷された文字）の解説文、その点訳を横並びに配置。その右手には先述の音声再生装置と同じ仕組みを使って、2020年度に作成したオーディオ・ガイドの再生装置を付けた。制作背景等にも言及した一般的な作品解説と、目の見えない／見えにくい人の利用を想定した「言葉による記述」を選んで再生できるようにし、台の上に原稿も貼付した。

会期序盤でまず気になったのは、立体コピーが多くの来館者に凹凸のある図として認識されていないのでは、ということ。教材の用途についても来場者に知って欲しいと思い、会期途中で各教材について解説したパネルを斜台の上に追加してみた。その後、他館の学芸員か

らアドバイスを受け、教材の解説は斜台から撤去し「やさしく さわってみてください」というシンプルなサインに差し替えた。この2回目の改善によって、ようやく来場者は立体コピーに自ら触れて凹凸に気が付きやすくなったと思われる。なお、会期中にも展示改善が可能となるよう、会場造作にはできるだけ可逆性のある材料や道具を用いた。



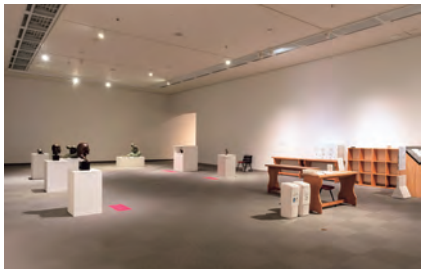
【監視スタッフより】
「［立体コピーは］おーすごい！と言いながらさわっている人や、どうやって作成したのですかと質問している人もいました。」
「［立体コピーは］さわられる方は少なかったように思いますが、さわられた方は感動しておられました。」

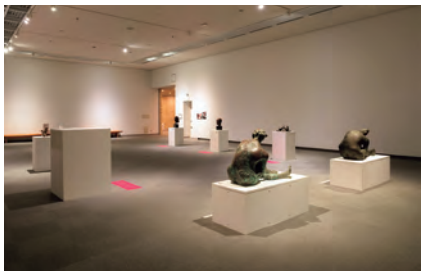
■点字シール

展示風景にはほとんど写っていないが、今回の展示は「全盲の方が一人で来館しても鑑賞しやすい環境」を目指しており、さわれる教材や作品を設置した台には点字のキャプションも付けていた。キャプションの作成には点字ラベラーを使用。点訳に不安のある単語や文章は、貼り付ける前に視覚障害者支援センターの方にもチェックをお願いした。

【担当者より】
「たくさんの来館者の方に展覧会を楽しんでいただきたいという気持ちで、点字シールの作成をしました。初めて点字について調べ、様々なルールがあることに驚きました。シール作成中は点字が合っているか何度も確認をし、ツールに貼る時は上下逆にならないよう気をつけました。展覧会が始まって、来館者の方が点字を通して能動的に参加されている姿を目にし、とても嬉しかったです。」
（内藤由華／担当：教育普及）

■「さわる」ための彫刻展示





本展第3章のタイトルは「彫刻にさわる」。当館の所蔵品のなかから、触察と固定が可能な彫刻作品を当館学芸員が選び、「さわる」ための展示台を新調して空間を構成した。今回の展示では、目の見えない／見えにくい人に限らず、すべての来館者が希望すれば作品にさわれるようにした。触察の前には、監視スタッフがさわり方のガイダンスを行い、来場者は再度ウェットティッシュで手指消毒し、時計やアクセサリーを外し、荷物をロッカーに入れた。監視スタッフのアンケート回答を平均すると、希望して作品にさわった人は全体の6割強程度だという。

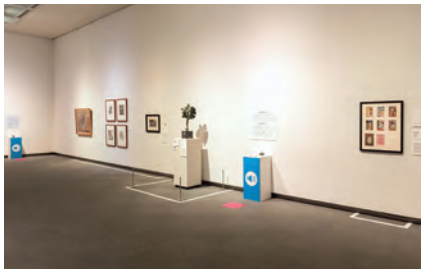
力の調節が難しい来館者の触察に備え、ボルトや固定具を使って、作品と展示台の天板を固定。さらに展示台は、アンカーボルトを使って床に固定した。晴眼者が視覚を遮りながら触察する体験もできるよう、1点には天板の上にコの字型カバーを付けた。展示したブロンズ作品は、当館の彫刻コレクションを代表する作家である柳原義達の作品5点と、佐藤忠良と舟越保武の作品各1点。柳原の《座る女》《しゃがむ女》は、サイズが大きいため、さわれる日時を限定し、学芸普及課スタッフの立会のもとで触察ができるようにした（13ページ）。

なお、個々の展示台には墨字のキャプションは付けず、点字キャプションのみを貼った。墨字の作品情報は部屋の出口付近にまとめて掲示。会場では視覚に障がいのある人に限らず、発達障がいのある人からも、彫刻にさわれて良かったという感想をいただいた。一方、とりわけ人物彫刻を人前で「さわる」ことに対して、羞恥や罪悪感、気まずさを覚えたという意見もあった。

【来館者より】＊さわれる彫刻のコーナーが印象に残った、という回答多数
「ブロンズ像のさわり方がむずかしかった。」
「ブロンズ像を実際に触り、その冷やかさが意外（考えたこともなく）。戸惑いました。」
「彫刻を触われたので表情などがわかりやすかった。」
（感覚過敏や自閉スペクトラム症、注意欠陥・多動症の傾向がある方）
「さわれる彫刻の部屋で、誰の何という作品かわからずに見て回り、それでも男の人の彫像には引き込まれるものを感じて、あとから壁を見て佐藤忠良の「群馬の人」だと知りました。個々にパネルで示されていないのがかえってよかった。」
「作品のそれぞれに［墨字の］キャプションを付けてほしい。」
【担当者より】
「最も心配したのは、重いブロンズ彫刻が倒れて来館者がケガをすることです。また、彫刻が揺れて、作品の接地面、固定部分が摩耗することも恐れました。結果的には杞憂でしたが、動かない固定具を検討し、会期中の点検を重ね、心配は尽きませんでした。鑑賞者の姿勢を工夫して（着席してなど）鑑賞するようにすれば、彫刻に力がかかりにくい状態を作れたかもと思い、今後はそちらも検討してみたいと思っています。」
（髙曽由子／専門：日本近代美術）

「立体彫刻を触って鑑賞する固定方法を検討するにあたり、作品の保全と転倒防止の両観点を重視した展示方法について話し合いを重ねました。展示台と床を固定し、更に作品と展示台を固定する案で決まりましたが、更なる課題は作品内部に固定具がついていない作品をどのように展示台に固定するかということでした。作品に傷がつかない材質でしっかり留まる固定具を選定し、設置時にも微調整しながら慎重に行いました。定期的に固定状態の点検を行うことで展示期中の安全を確認し、問題なく展覧会を終えることができほっとしました。当館所蔵の作品は色や形など同じ彫刻はないため、作品に向き合う大切さを改めて考える良い機会となりました。」
（橋本三奈／担当：保存修復）

■マット、テープ


普段より15cm低く展示

さわれるものとさわれないものを区別するサインを、視覚と触覚で感知できる分かりやすい方法を検討し、今回の展示ではショッキングピンクの視覚障がい者歩行誘導ソフトマットと、ざらざらした質感の白いすべり止めテープを活用。一人で来館した全盲の人や子ども、知的障がいのある人にも、さわる／さわれないが区別しやすい環境づくりを目指した。

さわれたり、手に取ったりできる教材や作品が置いてある台の手前にはピンクのマットを設置。このマットは、通常、車椅子やベビーカーの利用者も通行に苦労しない誘導ツールとして、線状に敷設するものだが、今回の展示ではあくまで目／足印として点状に使用。一方、白いテープはさわれない作品を囲むように貼付。ガラスやアクリルで保護されている作品については、壁やケースの周りにテープを貼り、表面保護がない作品の前にはテープに加え、金属やゴムの結界を設置した。

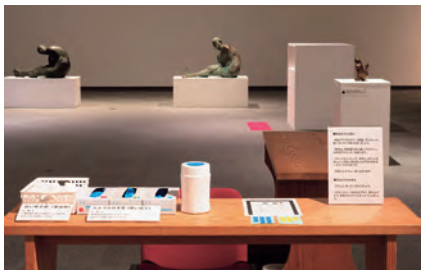
晴眼者からは概ね「分かりやすい」と好評だったが、一部の弱視の方にはグレーの床とピンクのマットのコントラストが低く、識別しにくいという指摘も受けた。また、全盲の方からは、もう少し幅広で厚みがあるものの上にテープを貼ってはどうか、という助言も受けた。

■音訳、点訳、その他の情報保障ツール

会場で配布した展覧会チラシと2種類のリーフレットの情報保障のために、できる限り多くの選択肢を用意した。音訳CDと点訳は視覚障害者支援センターが作成。印刷物には音声コードも掲載し、アプリを使ってテクストを読むこともできるようにした。当館のウェブサイトには各印刷物のオンライン版ページも設けている。会場内の小さい解説パネルは、希望者に白黒反転の拡大印刷も配布した。点訳音訳や拡大コピーは、会期前半に配布数があまり伸びなかったため、視覚障害者支援センターの広報誌（7月号）でも、テクストを読むためのさまざまな選択肢を紹介。なお、会場配布リーフレットには、表紙と裏表紙に厚盛クリアニス印刷による触図と点字を掲載した。

【参考】
三重県立美術館「『美術にアクセス!——多感覚鑑賞のすすめ』展　会場配布リーフレット　オンライン版」（3ページ参照）
鈴村麻里子「県立美術館に来てください」『はなしょうぶ（三重県視覚障害者支援センター広報誌）』196号、2021年7月
https://www.zc.ztv.ne.jp/mieten/p/hana196/04.html

■感染拡大防止ツール



アクセス展が開幕した6月はコロナ第四波がピークアウトして間もない頃であり、当館のボランティア「欅の会」も活動を休止していた。館内でも話し合いの場が持たれ、やはり誰もがアクセスできる展示を目指すのであれば、触察機会の担保は必要という結論に至り、感染拡大防止のためのガイドラインを作成した。来館者対応も接触を伴うため、監視受付スタッフは会場内でフェイスガードや手袋を使用した。

当館は出入口にも検温や消毒コーナーを設けていたが、アクセス展の来場者には入場前に再度スタッフの前で消毒や検温を依頼した。また、多くのさわれる教材や触地図はアルコール消毒ができる素材だったが、作品や木・紙でできた一部の教材はアルコール消毒が不可能である。苦肉の策として、会場入口や第3章の受付にはゴム手袋や白手袋も設置し、来館者が希望に応じて手に取れるようにした。会場出口と、手袋の取替を行う第3章受付には、センサー式ゴミ箱を設置し、ウェットティッシュや手袋を回収した。結果、ゴミの量は著しく増加した。また、体調に不安を抱える人や、遠方居住者（三重県のガイドラインに則り、美術館のウェブサイトには特定地域からの「ご来館はお控えください」の文言も掲載）からは来館をためらう声も聞かれた。会期中には特別支援学校の来館も2件あったが、現状では自身の勤務校は来館が難しいと言う教員もいた。

【来館者より】
「手袋の種類があったので、苦手な肌ざわりでないものを選べた。」（感覚過敏や自閉スペクトラム症、注意欠陥・多動症の傾向がある方）
【監視スタッフより】
「手袋も用意してありますという案内で、安心感を持っていただけたような気がしました。」
「彫刻にさわることが出来ると伝えると、すぐにお断りされる人もみえました。［略］コロナ禍でなければよかったのになぁと思いました。」
【参考】
鈴村麻里子「コロナ禍とアクセシビリティ——三重県立美術館の場合」ICOM日本委員会オンラインジャーナル、2021年8月20日
https://icomjapan.org/journal/2021/08/20/p-2535/

(3) 来館者

■来館者アンケート

来館者アンケートの回答方法は紙とオンラインフォームの2通り。回答数は計61件（紙49件、オンライン12件）。質問項目は当館が企画展開催時に実施しているアンケートと共通のものである。

【全体分析】

・展覧会全体や展示補助教材の満足度は4段階のうち「満足」と「やや満足」の合計が9割を下回っており、他の展覧会と比較しても決して高くはなかった。
・館内のスタッフに対する満足度は、「満足」と「やや満足」の合計が100%という非常に高い結果になった。
・印象に残った展示として、第3章の「彫刻にさわる」と第4章「オノマトペと共感覚」を選んだ回答者が多かった。
・当館への来館回数は「はじめて」が16%と高め。Cf. 直前の「若冲と京の美術」展では10%
・自ら障がいのある当事者であると書いて感想を記入する来館者もいたため、会場で直接会話することはなくても、アンケートを通して意見収集ができた（3件）。
・展覧会の印象は、「テーマが面白かった」が25%、「考えさせられた」が18%、「多くのことを学べた」「展示作品が良かった」が14%。他の展覧会では「展示作品が良かった」が1位になることが多い。

【アンケート回答の抜粋】

「視覚障害が進んできて、美術館をたのしめなくなっていたが、こういう取組をしてもらっているとわかり、うれしく希望がもてた。」
「企画のテーマはワクワクするもので、私自身も興味があるテーマなのですが、内容がやや薄いかもしれないと思いました。個人的な見解ですが、来る人が楽しめる企画内容が良いと思いました。」
「コロナ禍ということもあり音声や来館者と話すような場があればもっとよかったかと思います。」
「ただ鑑賞法を提案しているのではなく、所蔵作品の面白さや良さを示していたため。」（展覧会に満足した理由として）
「いろんな人の視点（立場も）で美術鑑賞を考え企画してくださったこと、嬉しく思いました。」
「今までのイメージとは違った新しい美術館と思った。」
「障がい者向けの取り組みを紹介する内容とは知らずに来たので、最初は少し驚いたが、いろいろな取り組みを知るうちに、美術への可能性を感じた。」
「展示が思ったより少ない。」
「子供が薄暗いのを怖がった為、ゆっくり見れず残念でした。」
「子どもにとってむずかしい作品を身近にかんじる事ができ、絵の背景にも興味をもてたようです。」
「感覚的に、自分には障がいがあるのかなあと思った。」（補助教材に不満を覚える理由として）
「多感覚の鑑賞が押しつけになっていました。三重県美の名作は、「多感覚」で鑑賞するものでしょうか。」
「名画名作を静かに鑑賞したかった。余計な仕掛が却って邪魔になりました。」

【その他の声】

「視覚中心の作品を、こんな観点からも鑑賞することができるのだということが体感できる、とても刺激的で楽しい展覧会でした。」（来館者のブログより）
・展覧会の情報がなかなか得られなかった。広報媒体はもう少し工夫した方が良いかもしれない。7月の『はなしょうぶ（三重県視覚障害者支援センター広報誌）』の記事でようやく展覧会の開催を知った。（三重県視覚障害者協会の団体来館時の聞き取りにて）

■監視スタッフアンケート

来館者アンケートからも、アクセス展に来場した人のさまざまな意見を得ることができたが、回答者は来場者の2%に満たない。会期中に最も来館者と対話し、来館者を見守っていたのは、監視スタッフや、インフォメーションのボランティアスタッフである。以下は、閉幕後に監視スタッフ対象に実施したアンケートの回答の抜粋。回答件数は10件。個別のディスプレイに関する回答は5−8ページで紹介した。

【これまであまり館内で見かけなかったけれど、アクセス展に来場していた人は？来場者の印象は？】

「思ったより若い層の方が来館されていた。」
「視覚に障がいのある人が多かった」
「白杖の方は後半になってきてくれた」
「学生さんがレポートを書いたり、同業者的な方が写真を撮っていたり」
「障がいのある方に携わっている方、教員の方や学生さんなど熱心な方が多かった」
「ひとつひとつ熱心に時間を掛けて見ていかれた方も多かった」

【あれば良かったというものは？】

「分かりやすいご案内（展示室の場所、傘立て）」
「［視覚に障がいのある人のための誘導］マット、手すり」
「今はコロナのため無理ですが、好きなだけ作品の感想を話しながら見れる展覧会もあってもいいのにな」

【その他、気づいたことは？】

「視聴覚障がいの方も楽しめる企画でしたが、対象の方があまり来られてなかったように思うので残念です。」
「元永さんの作品をみて、ベビーカーにのった赤ちゃんがすごく反応して声を出して笑って喜んでいました。」
「耳のきこえないご夫婦が来られた時［略］こちらはメモに書いて伝えさせていただいたのですが［略］手話を習っておけばよかったなぁと思いました。ご夫婦では手話で話されておりました。」

寄稿

「軽やかであるために重くあること」

小田久美子（エデュケーター）

「美術にアクセス！」展の最後の会場である元永定正の作品に囲まれた空間で、私はふわっと体が軽くなるような感覚になった。「オノマトペと共感覚」のテーマで選ばれた作品達がもつ造形要素がそうさせたのは言うまでもない。何より、それまでの展示室で指先など集中的に感覚を使い思考を促されてきたからこそ、全身で作品を味わう準備ができていて、一種の解放感に包まれたのだと思う。

本稿の依頼を受けてから、この軽くなった感覚を出発点に考えを巡らせてきた。筆者は、本展担当学芸員の鈴村さんからの当初の依頼では、展覧会に係るワークショップや研修などを現場に通いながら一緒に作り上げる予定だった。しかし、コロナ禍や私自身の妊娠出産という個人的な事情によって、遠隔での助言…というには大いに心もとなく、鈴村さんの構想や事業進捗をお聞きし、自分自身の経験や考えを参考情報として提供する役割を担当させていただいた。新型コロナウィルスの感染者数が少し落ち着いたタイミングでの展覧会開幕だったので、今思えば奇跡的に三重県外から来場することが叶った。

軽さあるいは軽やかさについて考える中でまず思い至ったのは、この展覧会へ向けての取り組みの１つ「ソーシャルガイド」だ。私もこのガイドの制作過程を共有していて少し意見を寄せたが、美術館とはなんと暗黙の了解という名のルールが多い施設であることか…と改めて実感した。それらを「良かれと思って」一つ一つ列挙していくことで、どんどん重たくなっていく情報量。例えば、傘など展示室で使用しない荷物を預けることが推奨されるのは、作品や他の来館者にぶつからないようにという理由もあるが、持ち歩く荷物は少なく身軽な状態で鑑賞した方が疲れないですよ、というメッセージでもある。美術館をよく利用する人にとっては、うっかり荷物を預け忘れてスタッフから声をかけられると「美術館あるある」をやっちゃったという感覚になるというと言い過ぎだろうか。

本ソーシャルガイドでは、三重県自閉症協会のアドバイスにより、何か必要があればスタッフが声をかけるため、この点は記載はされていない。そのアドバイスを鈴村さんからお聞きした際に、相手の声を聞いていない「良かれと思って」とは、まさに自己満足にすぎないのだと気付かされた。こちらの要望を予め伝えきることよりも、何か双方にとって不都合なことが現場で起こっても声をかけ合いましょうという状態をつくり、コミュニケーションの回路を淡々とひらいておくことが必要なのだ。

ソーシャルガイドには載っていない交通アクセスやより詳細な施設に関する情報は、美術館公式サイトの「はじめて来館する人

へ」のコーナーで読むことができる。今回、0歳児連れで初訪問することになった私も活用したのだが、ぜひソーシャルガイドと比較して読んでみてほしい。

また、以前私が美術館の職員として盲学校や特別支援学校の団体を対応した際に、ある先生が言っていたことも思い出された。障害のある生徒は、在学中に経験したことが卒業後の生活にも大きく影響するため、在学中に「余暇活動」という枠でカラオケやボーリングなどへ行くとのことだった。美術館への来館もその枠を利用していた。それを聞いた美術館のスタッフの中には「余暇」という言葉に「普段は必要のない余分なもの」という軽んじられたようなニュアンスを感じて、少々反発をおぼえている人もいた。ただ、私自身は美術館に来館することが余暇を過ごすための場所の候補とすら認識していない人は、障害の有無に関わらずきっと自分が想像しえないほど多いのだろうと途方もない気持ちになり、課題を大きくとらえ直した。

「幅広い人々に（まずは）気軽に来てほしい」とは、ミュージアムのスタッフの願いであり、そのために努力と工夫をしている館ばかりだ。専門家や愛好家、観光客だけでなく、学校団体や親子連れ、高齢者、昨今ではソーシャルインクルージョン（社会包摂）や地域共生の理念のもとに、障害者や外国人、ひきこもりなど社会的に生きづらさを抱えている人々をむかえる対応や協働に取り組んでいる館も増えてきた。法令が出たから、サービスが必要とされているから、インクルーシブデザインの考えのように、その分野にこれまで関わっていなかった多様な人々（当事者）と協働するとその分野にとっても新たな価値を創出でき、それは当事者以外にも有用な可能性があるからという点もある。しかし、インクルーシブミュージアム代表の安曽潤子さんの指摘のとおり、根本的にはあらゆる人々の人権に関わるからということを忘れてはならないと感じている。＊

本展のような取り組みは、毎回の展覧会で万全に行いたくとも、予算や人員など限りがあり難しいのが正直なところで、これは多くの館が抱えるジレンマだろう。でも、一度でもアクセスについて実践した学芸員のみならず来場者と接するスタッフがいることは、機材の活用も含めコミュニケーションの技術の選択肢がそれだけあるということであり、財産だ。スタッフ一人一人の経験と知識が役に立つ時がきっと来る。

多様な人々との協働や地域共生というと、自分も含めた誰もが心地よくいられるような幸福なイメージを漠然と抱くのではないだろうか。しかし、人と人が初めて出会うこと自体、往々にして緊張と齟齬が生まれる。人と美術、人と人の接点となる美術館に求められるのは、そこで問題が何か起こったとしても対話して合意形成をする意思であり、安全な議論の場であり続けることだ。もしかしたら、お互いの居心地の悪さを分け合う場面の方が多いのかもしれない。自分の想定の限界もあらわになり、簡単に分かり合えない状況では不安や葛藤は常に付きまとう。

それでも、これまでの三重県立美術館の取り組みや本展によって美術館から発せられた「ようこそ美術館へ」、「こんな楽しみ方もありますよ」というウェルカムメッセージを受け取った人は、確実に増えたのではないだろうか。そして、来館するきっかけを作り、そこで過ごす時間を楽しむ工夫や準備をすることは、来館者と呼ばれる私たちにも美術館と共にできることであるはずだ。

その思いと共に、軽やかさやそれを支える重さについての思考の旅の終わりに頭に浮かんだ風景は、エントランスに展示されていた宮田雪乃さんと金光男さんと参加者の皆さんによる「あなたとわたしのバランス」のワークショップで作られたやじろべえ達だ。参加者がぎゅっと粘土を握った力強く生々しい造形が、左右のバランスを繊細にとりながらふわりと空中に浮いている。一つのやじろべえでも、その両端についた粘土は他人同士。お互いが距離感を保ちながらバランスをとっているコロナ禍の世界がコンセプトとのことだが、一人一人が違いをもったまま一緒にそこにいることの可能性も軽やかに示していた。ちょうど私が鑑賞した時は、違うやじろべえの粘土同士がこつんとぶつかっていて、さらにその上にまた別のやじろべえの棒が重なっているところがあった。まだ見ぬ誰かにアクセスする／されるため、そこで行われているコミュニケーションはどんなものか、想像し考え続けたいと思わされたイメージである。

＊安曽潤子「インクルージョンを行うことの「メリット」…を伝える際の葛藤」、ブログ「ゆるジオ」、2022年1月31日、http://slack-geo.blog.jp/archives/29579085.html（2022年2月10日アクセス）

寄稿者紹介

小田久美子さんは、教育普及担当学芸員として2018年までアーツ前橋に勤務し、現在は群馬県前橋市を拠点とするフリーランスのエデュケーター。アーツ前橋在籍中から学校や福祉施設と協働する事業を担当し、2018年に開催された全国美術館会議の第32回学芸員研修会でも第4分科会「美術を通した共生」の運営に携わった。アクセシビリティ事業を立ち上げる前から相談に乗っていただいており、判断に迷う時には常に的確な助言や情報提供により道筋を示していただいている。

（4）関連プログラム

「誰もが」利用できる展覧会を目指す以上、関連プログラムのアクセシビリティ担保も不可欠である。利用者のプログラム参加が叶わない要因としては、物理的距離や交通の便の問題（美術館にアクセスできない、コロナ禍で移動が困難）や、日程の問題（実施回数が少なく日程が合わない）、情報保障やコミュニケーションの問題（手話通訳がない）、アクティビティの複雑さの問題（障がいのある人や子ども等、一部の人には取り組みづらい）、予約にかかる課題（指定された予約方法が使えない、体調が直前まで分からず事前登録しづらい）、広報の課題（情報が行き渡っていない）等が考えられる。アクセス展のプログラム構成においては、一つのプログラムですべての課題を克服するのではなく、さまざまな利用者が自分の希望に沿ったものを選べるようなヴァリエーションの豊かさを目指した。

なお、プログラムについては「要約筆記や手話通訳、その他支援の必要な方は事前にご相談ください」と付記し広報していたが、手話通訳や要約筆記のリクエストは0件。「希望があれば応じる」という書きぶりは、当事者の参加のハードルを上げかねない。また、障がいのある当事者が運営に携わったプログラムもごく一部に限られていた。多様な人が初期段階から企画に関わるプログラムを開催することも、今後の目標である。

■「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」

①美術館でのプログラム
日時：2021年7月17日（土）14:00-16:30
会場：三重県立美術館企画展示室　⇒オンライン開催に変更
②オンラインプログラム
日時：2021年7月18日（日）13:30-16:30
方法：オンライン会議システムZoomによる開催
講師：林建太、浦野盛光、衛藤宏章、濱松若葉（「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」メンバー）
参加者数：計15名（17日8名＋18日7名）　＊応募者数計63名（17日28名＋18日35名）
担当：鈴村麻里子、内藤由華、道田美貴、髙曽由子

鑑賞ワークショップ企画運営の実績豊富な団体「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」のメンバー主導でZoomを使った打合せやリハーサルを実施。申込は三重県の電子申請システムからの予約を基本とし、電子申請を望まない人の申込は個別にメールやファクシミリ、電話等で受け付けた。

本プログラムは定員の4倍に近い申込があったため、抽選を行い、参加者を確定した。申込フォームには「障がいの有無」を尋ねる項目もあったが、視覚障がいを中心とした障がいのある当事者からも申込があり、当館への来館回数、年齢、居住地等も異なる、さまざまなバックグラウンドを持つ人がワークショップに参加することとなった。当初は対面とオンラインのワークショップを1回ずつ行う予定だったが、感染状況を鑑みて最終的には2回ともオンラインで実施。土曜のプログラムについては、自宅からのオンライン参加が難しい4名が当館の会議室から参加した。

当日は「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」の目の見えないメンバーと目の見えるメンバーが鑑賞プログラムを進行。目の見えない人、見えにくい人、見える人が参加して、モニターに映し出される作品について、見えることや見えないこと（印象等）を言葉で共有し合った。参加者が鑑賞に集中していると、ある瞬間に、「見える人が見えない人を支援する」という、ともすれば無意識に共有されている関係が顕在化し、それが揺らぎ始める。支援者／被支援者という構図を超えた新たな人間関係に難なく順応する参加者もいれば、疑問を覚えたり抵抗を感じたりする参加者もいた。作品を前に各々の意見がすれ違い、ぶつかることは、参加者に爽快な印象や一体感をもたらさなくても、ワークショップ運営においては非常に重要かつ有意義な出来事であると言える。2日間実施したこのプログラムは、同じ作品（長原孝太郎《焼芋屋》、中谷泰《烏賊のある静物》、元永定正の抽象絵画数点）を扱いながら、大きく異なる展開となった。

【講師のコメント（Facebookへの投稿より抜粋）】
「美術へのアクセスを考える展覧会で様々な人が同一の経験をするのではなくバラバラなアクセスの仕方によって一人一人の経験が立ち上がっていた事を実感し嬉しく思いました。」
「今回は美術（館）関係者の関心が高く、見学希望なども多く寄せられたことも印象的でした。新型コロナの感染状況をはじめとして社会の状況が日々めまぐるしく変わる中で様々な美術館でアクセスプログラムの実践と試行錯誤がされているようです。しかし、その知見はまだまだ共有されてはいないようです。私たちとしてはできる限り美術館との連携をしながら新たな知見を共有し、新たな疑問や戸惑いも含めて話す場を作っていきたいと思っています。」
【参加者より（アンケートの抜粋）】
質問：ワークショップに参加して気づいたことや考えたことは
「見識を広げるとか経験を糧にしたいとかより、話すのも聞くのも楽しくて、もっと会話したくて、自分がそう思えていることに気づいたのもとても嬉しかったです。」
「何よりも平素気づいていなかった自分に気づいたことです。」
「私がこのプログラムに参加できて本当に良かった、元気をもらったと思えたのは、このような厳しい時代にあっても他の人と真摯に関わろうとする人たちがいることを感じられたことでした。」
「見えている人が見ている絵を転写するように目の見えない人のイメージに浮かび上がらせるのが目的では無くて、もしかしたら、イメージが全く違っても、その人の中で楽しめるアートが出来上がっていたら、それはそれで楽しいのかなと思いました。」
「オンラインということで、作品の大きさがわからない。物理的な美術館での新しい部屋に入って行って目の前に巨大な作品が現れた時の、「おお」という新鮮な感覚は当然持ちようがなく、大きな作品も小さな作品も等価であったのは、作品のサイズの意味について考えさせてくれました。」
・オンラインは話すタイミングがつかみにくいので、やはりコロナ後に対面で参加できると良い。今度は対面で参加したい。（電話での聞き取りより）

■投稿プログラム「カタリナにアクセス!」
申込・配布期間:2021年5月20日(木)−8月1日(日) ＊投稿期限は8月31日(火)
ハガキ掲示期間:2021年6月5日(土)−8月1日(日)
参加者数:計29名
担当:鈴村麻里子、内藤由華、髙曽由子、大﨑千野(現・東京都写真美術館学芸員)

《アレクサンドリアの聖カタリナ》についての「あいうえお作文」を考えるプログラム。参加希望者は、電子申請または来館受取の方法でワークショップ参加キットを入手する。キットには作品の絵葉書とワークシート、投稿ガイド、作品解説、「せいかたりな」の6文字のうち2文字が書かれた2枚のハガキが封入されており、参加者はハガキ1枚に作品画像を見た感想やコメントを記入し、ポストに投函する。本プログラムはオンラインプログラムに参加しづらい人でも参加できるアナログな遠隔プログラムとして企画した。鑑賞支援ツール「あいうえおブロック」(5-6ページ)の開発当時、ブロック裏面の文章の執筆に苦戦したことから、より良いコメントを参加者と一緒に考えたく、このテーマを採用。ところが、「あいうえお作文」といいながら本プログラムは折句とは異なるため、参加者に戸惑いを与えたようだ。キットは200部弱捌けたにもかかわらず、回収が15%程度にとどまったのも、作文のしにくさに起因するかもしれない。8月末に締め切った投稿は学芸普及課スタッフと館長が目を通し、9月下旬に入賞作品の発表を行った。会期中に来館した三重県立盲学校高等部の生徒、先生からも投稿があった。

【入賞作品】
レトリック賞 「祈れども 意志貫けども 生きられず」(ペンネーム:山岸想我)
キツネ賞 「カタリナのように、強く信じられるもの、自分の中にあるかなぁ…(…推しぐらいかな。命はかけられないかな。)」
(ペンネーム:おだっつ)
インパクト賞 「な、な、なんて日だ!!!…と叫びそうな表情から緊張感すごい。さすが明暗のバロック時代。」(ペンネーム:Jubbilly13')
【参考】
入賞作品の画像と、すべての投稿は以下に掲載
三重県立美術館「投稿プログラム『カタリナにアクセス!』」
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/0002528 10.htm

■《座る女》《しゃがむ女》にさわれる日
日時:2021年6月6日(日)、26日(土)、7月3日(土)、22日(木・祝)、8月1日(日) 14:00−17:00
体験者数:計220名(6月6日40名+6月26日31名+7月3日28名+7月22日48名+8月1日73名)
担当:髙曽由子、鈴村麻里子、内藤由華、橋本三奈、道田美貴、原舞子、村上敬、坂本龍太、上村友理

第3章「彫刻にさわる」の7点の作品のうち、柳原義達《座る女》《しゃがむ女》の2点は等身大の人物像であるため、安全性を考慮し、来館者が学芸普及課スタッフの立会のもと触察できるよう、触察可能日時を限定した(他の5点は常時触察可能)。3時間の触察時間を前半と後半に分け、各日2名以上のスタッフで対応。この時間帯のみ、展示台の前に貼った白いテープ(さわれない目印)をピンクのマット(さわれる目印)に貼り替えた。来館者は希望すれば誰でも予約なしで触察を体験できる。なお、これらの日時以外でも、目の見えない/見えにくい人が来館し触察を希望すれば、学芸普及課スタッフが個別に立ち会ってさわる鑑賞ができるようにした。

【担当者より】
「当初心配していた力をかけてさわる方、たたく方はおらず、戸惑いながら触る方が多い印象でした。等身大の人型彫刻については、その存在感に圧倒される方が多いようで、小さいお子さんは非常にこわごわ、恥ずかしそうに触っていたのが印象的でした。」(髙曽由子)

■担当学芸員によるスライドトーク
①美術館でのトーク
日時:2021年6月19日(土)、7月4日(日) 14:30−15:10
会場:三重県立美術館講堂
②オンライントーク
日時:2021年7月25日(日) 14:30−15:10(15:30まで質疑応答)
方法:オンライン会議システムZoomによる開催
参加者数:計41名(6月19日14名+7月4日9名+7月25日18名)
講師:鈴村麻里子
担当:髙曽由子、内藤由華、道田美貴、原舞子、村上敬、坂本龍太、橋本三奈、上村友理

オンライントークの様子

展覧会の成り立ちや当館のアクセシビリティ向上の取組について40分で解説するプログラム。同じ内容のトークを対面2回、オンライン1回で実施した。オンラインプログラムには、展示を体験していない人も多く参加。前週の「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」と同様、オペレーションを委託し館内の会議室から配信した。

【参加者より(アンケートから抜粋)】
「もう少し長い時間のお話しを伺いたかったです。」
「HP、パンフレットを見るよりも内容が良くわかり、参加して良かったです。」
「今、コロナ禍の中ですができるだけたくさんの方に利用してほしいという意志がつたわりました。」
「常設展をはじめとする、これからの三重県美術館のアクセシビリティに期待しております。」
「オンライントークは非常に手軽に参加できます。できれば、このような取り組みは今後も継続していただきたいです。」
(オンライントークについて)

■ワークショップ「あなたとわたしのバランス」
①「握る」
日時：2021年6月12日（土）、7月10日（土）14:00−16:00に美術体験室を開室　＊予約不要、所要時間10分程度
②「バランスをとる」
日時：2021年6月13日（日）、7月11日（日）11:00−12:00、14:00−15:00　＊各回開始1時間前から整理券配布
講師：宮田雪乃、金光男（美術作家）
参加者数：
「握る」 計51名（6月12日27名+7月10日24名）
「バランスをとる」 計37名（6月13日午前6名　午後10名+7月11日午前11名　午後10名）
担当：鈴村麻里子、髙曽由子、内藤由華、原舞子、橋本三奈、坂本龍太、上村友理

本ワークショップは、知的障がいや発達障がいのある人、小さい子ども等、アクティビティの複雑さが参加の障壁となり得る人も気軽に参加できるシンプルな構成を目指した。講師は県内在住美術作家の宮田雪乃氏と金光男氏。版画家として活動する宮田氏は特別支援学校の教員でもあることから、「障がいの有無にかかわらず誰でも参加できる」ワークショップの企画を持ちかけた。粘土の種類や作業手順については、宮田氏と金氏が幾度もテストを行って検討。さまざまな素材を試したが、最終的には最も握りやすく時間が経っても質量が変化しない油粘土を用いることにした。土曜に実施した「握る」は、所要時間10分足らずの、木製丸棒の端に油粘土を一握り付け、片手でぐっと握り込むプログラム。土曜のワークショップにはさまざまな人が参加しており、シンプルなアクティビティ、予約不要の立ち寄り式、短時間という要素がアクセシブルなプログラムの要件となることを改めて確認できた。日曜の「バランスをとる」は整理券方式、定員ありの60分のプロ

グラム。参加者は油粘土を握り、前日に誰かが握った粘土と組み合わせて、棒の長さを調整しながらやじろべえを作成した。やじろべえは、当館のエントランスホールでアクセス展の会期末まで展示した。

参加者は、握った粘土のキャプションとして各自「名前（ニックネーム可）、年代や年齢（自己定義可）、夢」を記入。参加者の個性が表れた粘土と、その人となりが窺えるキャプションの展示は、プログラムに参加しなかった来館者からも好評を得た。

【日曜のプログラム参加者より】

「小さい子どもでも参加できるWSですね。」

「ねんどをにぎるのは久しぶりでちょっと楽しかったです。」＊粘土を扱うのが懐かしい、楽しいという回答多数

「人とのつながりを身近に感じるものでした。」

「いっしょに作品をつくる。というワークショップはむずかしいかと思いましたが、知らない誰かとの作品ができて面白いと思いました。」

「後出しでバランスを取ったり、相手のキャプションと対になるようにと思って考えたりと見えない人との対話が楽しかったです。」

「現実には、一生会うことのない方（たぶん）と1つのやじろべえを作ることをとおして、社会で生きるうえでも、会うことのない人とうまくバランスをとって関わっていることを目に見えるかたちで実感することができた。」

「コロナの時代にソーシャルディスタンス等、人との色々な距離について考える良いきっかけになった。」

【講師からのコメント】

「コロナ禍という状況下で開催されたこのワークショップへの思いは特別なものとなった。展覧会開催の1年ほど前にこの話を持ちかけてくださった学芸課の鈴村氏と我々は「おそらくワークショップの開催時期には今よりも良い方向へと向かっているだろう」という捉えで話を進めていた。しかし状況は一進一退、まるで変わらない。美術館など公共の施設に課される厳しいガイドラインに対し、やりたいことが儘ならない、歯痒い思いがあった。しかし、その歯痒さがあったからこそ、今回のワークショップで制作された作品の重要性を感じている。

ワークショップの参加者は半ば強制的に我々の考えた制作のルールに則って作品をつくる。そして、自分のテーブルにたまたま置かれているキャプションを、くじを引くように選ぶ。それが自分の作品のペアになり、そのペアの作品と一つの台座を共有してやじろべえを完成させる。

参加者がペアになった作品を壊さないように優しくそっと持ち上げて、自分の作品とのバランスをとるために、ああでもないこうでもないと模索する姿はすごく素敵だった。あるいは大胆にパッと決めて、さっさとバランスをとってしまう強者もいた。かけた時間はどうあれ、知らないもの同士がペアになったやじろべえは最終的に30基ほどとなり、美術館のエントランスでゆらゆらと動き、時折別のやじろべえとぶつかりながらのんびりと佇んでいた。少し離れたところにある椅子に座って眺めていると、大きな白い台座の上に置かれたやじろべえが建物のようで、どこかにある小さな町のように見えた。

収束の目処の立たないこの状況下で、我々を含めて皆がぐったりと疲れている。疲れているけど、楽しまなければ生きてゆけない。だから、楽しむ方法は世の中に無数に用意されている。その中に「ものをつくる」という行為が含まれていて、しかも「ものをつくる」という行為は誰も知らない可能性を秘めている。我々はその可能性のことを信頼していて、もう何年も何年も、ものをつくっている。そんなことばかりしていると人との距離は言わずもがな離れていくのだけど、でもやっぱりふとした瞬間にぶつかってくる人との関係が我々の財産になっている。今回のワークショップで出会った参加者の方と過ごした時間も同じく、大切なものになった。

最後になりましたが、我々の思いを最大限に汲みながら、開催に踏み切ってくださった三重県立美術館の方々に感謝申し上げます。」

3. 利用者・未利用者調査

(1) 基本情報

アンケート実施期間:2021年9月22日(水)−10月11日(月)
回答者数:820名(対象者数1,182名、回答率69%)
担当:鈴村麻里子

(2) 概要

この調査には、三重県が各種の行政課題について事前登録した三重県民を対象に行う電子アンケートシステム「e-モニター制度」を利用した。美術館を利用したことがない「未利用者」は、美術館が想定する「利用者」から零れ落ちることもある。今回のアンケートでは、未利用者を含む820人に9つの質問をした。結果報告書はe-モニターのウェブページにて公開中(ページ下部参照)。本報告書では、アンケート結果の一部を紹介する。

(3) アンケート結果(抜粋)

【Q1】県立美術館について 1
あなたは、津市にある県立美術館を知っていますか。(820人)

①知っている	682人	83%
②知らない	138人	17%

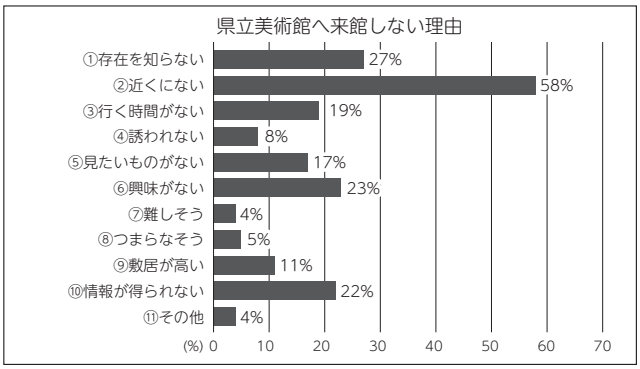
【Q3】県立美術館への来館回数について
今まで県立美術館に何回行ったことがありますか。(820人)

①1回	118人	14%
②2回	77人	9%
③3回	39人	5%
④4回以上	171人	21%
⑤行ったことがない	415人	51%

【Q1】の美術館認知度の質問では、「知っている」と答えた人が83%だが、実際来館したことがある方は、それを下回る49%だということが分かる。

【Q5】県立美術館へ来館したことがない理由について
Q3で「行ったことがない」を選んだ方にお聞きします。県立美術館に来館したことがない理由は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(415人、819回答)

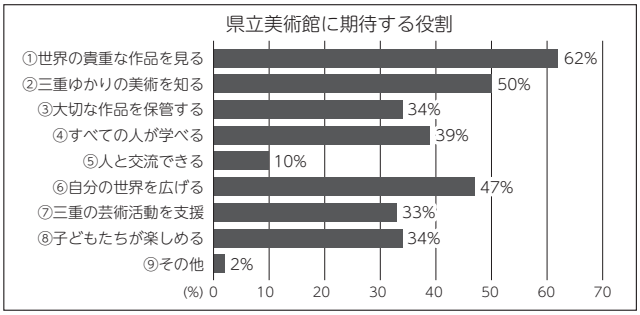
①存在を知らなかったから	112人	27%
②近くにないから	239人	58%
③行く時間がないから	77人	19%
④友人や家族に行こうと誘われないから	35人	8%
⑤見たいものがないから	70人	17%
⑥興味がないから	95人	23%
⑦難しそうだから	18人	4%
⑧つまらなそうだから	22人	5%
⑨敷居が高い印象があるから	44人	11%
⑩何をやっているのか情報が得られないから	90人	22%
⑪その他	17人	4%



県立美術館にこれまで来館したことがない理由としては、「近くにないから」という回答が最多で(239人、58%)、全体の半数以上が選択。次に多い回答が「存在を知らなかったから」で112人(27%)が選んでいる。「その他」の理由としては、「コロナ禍だから」「子どもがまだ小さいから」等が挙げられた。

【Q8】県立美術館に期待する役割について
県立美術館に期待する役割は何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。(820人、2538回答)

①世界各地の貴重な美術作品を見る場所	512人	62%
②三重県ゆかりの美術について知る場所	406人	50%
③大切な作品を保管する場所	275人	34%
④すべての人が美術や美術館について学べる場所	316人	39%
⑤美術を通してさまざまな人と交流できる場所	80人	10%
⑥多様な価値観に触れ、自分の世界を広げられる場所	383人	47%
⑦三重県の芸術活動を支援する場所	268人	33%
⑧次世代を担う子どもたちが美術を楽しめる場所	282人	34%
⑨その他	16人	2%



最も多かった回答は「世界各地の貴重な美術作品を見る場所」で512人(62%)、次が「三重ゆかりの美術について知る場所」で406人(50%)、次いで「多様な価値観に触れ、自分の世界を広げられる場所」で383人(47%)。9つの選択肢のうち6つを、3分の1以上の回答者が当館に期待する役割として選んでいる。この選択肢は「三重県立美術館のめざすこと」を参照しながら設定した。

(4) 参考

アンケート結果(全体)は以下のページで公開。
三重県立美術館「2021年度 県立美術館 e-モニターアンケート実施報告書」2021年(PDF版)
https://www.e-kocho.pref.mie.lg.jp/monitor/files/382_2021Questionnaire_MPAM.pdf

4．プログラムの記録動画公開

（1）基本情報

公開期間：2022年2月21日（月）－3月21日（月・祝）
撮影・編集：三重県立美術館、Beacon
映像時間：1時間54分27秒
掲載先：動画共有プラットフォームYouTube（限定公開）
視聴申込人数：70名（2月25日時点）
担当：髙曽由子

（2）概要

「杉浦非水　時代をひらくデザイン」展会期中に開催した講演会「杉浦非水が目指したもの：その生涯と仕事」（講師：長井健氏／愛媛県美術館専門学芸員）の記録動画。制作の背景には、コロナ禍におけるイベント開催で、専門的な講演を依頼しながら、参加者を減らさざるを得ないことに、長らく葛藤があったことがある。また、講演会という形式のイベントは、小さな子供連れ、耳が聞こえづらい来館者には参加しがたいことも懸念であった。

動画制作に際しては講師の快諾を得て、動画編集を行うBeaconとの話し合いの中で制作方針が決められた。当初音声にパワーポイント画面と部分字幕を組み合わせる簡単な動画を想定したが、講師の身振りを伝えるワイプ映像を加え、全編字幕を付ける方針に変更。当日撮影・録音はBeaconと美術館で行い、文字起こしは美術館が、動画編集作業はBeaconが担った。

担当者としては、動画に全編字幕をつけることで、耳が聞こえづらい方が参加しやすくなること、また移動中など音声を出して視聴できない環境でも視聴しやすくなることを期待した。

字幕は可読性を考慮してできるだけ文字数を削ったが、それでも2万字弱の分量となり、画面上の文字量が多くなり過ぎたという反省もある。また、書き起こし担当者の聞き間違いによる誤字が起きる問題もあった。（髙曽由子）

記録動画の一場面

（3）視聴者より

■視聴申込フォームから

講演会開催前に感染状況が悪化し三重県の方針が更新されたため、参加予定者には県外からの参加について自粛協力を依頼した。

「講演会への参加を楽しみにしておりましたが、県外人のため、残念ながら参加を断念しました。せめて雰囲気だけでも味わえればと期待しております。」

「オンラインでリアルタイムに配信していただけるともっと良いかと思います。」

「本当は、明日伺う予定で申し込んでいましたが、［略］泣く泣く諦めました。講演を楽しみにしていたので、本当にありがたいです。」

■視聴後アンケートから

「オンラインでの講演会の記録動画は都合の良い時間に拝聴でき、また、個人的には対面より、集中できる点が良いと思います。関心のある分野でとても良かったです。ありがとうございました。諸事情で来館できない場合、大変よいシステムと思います。」

「もう一度杉浦非水の作品をゆっくり見たくなりました。」

5. 認知症のある人のためのプログラム検討

(1) 概要

アクセシビリティ事業でもいずれ認知症のある人向けの取組を実施できればと考えていたところ、その分野において先進的取組を行う一般社団法人アーツアライブより、希望館で講演会と鑑賞会の実演を実施するという案内が届いた(「障害者による文化芸術活動推進事業」)。同事業に応募し、2022年1月29日、30日にアーツアライブ代表理事の林容子氏の関係者向け講演会と、林氏による当事者と家族向け鑑賞プログラムの実演を計画。公益社団法人認知症の人と家族の会三重県支部の協力を得て参加者も募集したが、感染拡大を受けて講演会はオンラインに変更し、実演は中止。林氏には予定通り来館を依頼し、主に講演前日の28日にアクセシビリティ事業の運営や、館内の導線や設備、常設展示に関する助言を受けた。

6. 多様な作品解説の展開——三重県立四日市高等学校との連携事業を中心に

(1) 基本情報

コメント掲示期間:2022年2月23日(水・祝)—4月3日(日) ＊ウェブサイトには4月4日以降も掲載
掲示会場:三重県立美術館企画展示室
執筆:三重県立四日市高等学校美術Ⅰ選択者107名
担当:森本彩(同校美術科教諭)、鈴村麻里子、内藤由華、原舞子、橋本三奈

(2) 概要

昨年度から当館では、アクセシビリティ事業の一環で展示補助教材の内容や媒体について検討を行っている。今年度も昨年度に引き続き、三重県立四日市高等学校の生徒が当館の所蔵品に対するコメントを執筆し、それを来館者と共有する取組を実施した。

今年度はコレクションによる特別展示「春をまちわびて 美術から考える自然との調和(=エコロジー)」の出品作であるピエール・ボナール《ヴェルノンのセーヌ川》、浅井忠《小丹波村》、児島善三郎《箱根》、中谷泰《陶土》、牛島憲之《貝焼場》、イケムラレイコ《birdgirl》の6点から1点を選び、生徒がコメントを執筆。ポイントは、読み手が自らすすんでじっくり作品を鑑賞したくなるような文章を、読み手に伝わる言葉で書くこと。授業は2時限の構成で、1時限目は美術館の職員が美術館の展示や補助教材について話し、2時限目は教員が執筆を指導した。

(3) コメントの例

ピエール・ボナール《ヴェルノンのセーヌ川》1912年

「やわらかなタッチで描かれた木々には、黄色い暖かな光が当たっています。花が咲いているのでしょうか、川の向こうの草原はいろんな色で描かれています。一方、川では船がもうもうと煙を出しています。私は、この絵から「自然」と「人工」の対比を感じました。あなたは何を感じましたか?」

「柔らかく、まどろんだ印象を受ける絵。深みのある緑の木々、優しい流れの川、遠くに見える山々、これらは1912年のセーヌ川の風景として描かれたはずなのに、見たことがあるような、どこか懐かしい雰囲気を感じます。同年、作者はこの地域の家を購入したそう。遠い時代の作者のことが、なんだか身近に感じられます。」

「遠いところは淡い色で、まるで霞がかかったかのように描かれており、色の濃淡から遠近を表現しているように見えます。どこか幻想的に思えるのはそのせいでしょうか。小さく咲いている花々や木々が、川を通り行く船を歓迎しているように見え、暖かくのどかな雰囲気を感じます。」

(4) 担当教員より

「美術館の所蔵作品を高校1年生が観て、気付いた事、推理した事、面白いと思った事などを文章にして、作品を観た方に問いかけをしています。読んでいただくと、作品の見え方が広がるかも知れません。

この取り組みは今回で2回目です。生徒達に三重県にゆかりのある作品や、所蔵作品に愛着を持って欲しいと思い美術館と連携しました。

学校が美術館から遠く、どの様に連携すれば良いか模索していました。今回は美術の授業で学芸員の方に来ていただき、パソコンから美術館の所蔵作品をじっくり観て文章を考えました。作品のコメントを通して、来場者の方と作品の面白さを共有できれば幸いです。この取り組みに、ご協力いただいた皆様に心から感謝をしております。ありがとうございました。」(森本彩)

(5) 参考

三重県立美術館「コレクションによる特別展示『春をまちわびて 美術から考える自然との調和(=エコロジー)』高校生のコメント」
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000259506.htm

むすびにかえて

鈴村麻里子

この報告書を編集している2022年の2月時点、私たちはまだ始まったばかりのアクセス向上の途上で、試行錯誤を繰り返している。今後も長く続いていくであろう道を「むすぶ」のは先送りして、ひとまずは「むすびにかえて」事業を振り返ってみたい。

今年度の事業では、報告書の構成からもお分かりいただけるように、何を措いてもアクセス展の開催が大きな位置を占めた。会期中のトークや過去に執筆した原稿と内容は一部重複するが、この展覧会で目指したことや、成果、課題を整理してみたい。

1．目標――対象を広げる

アクセシビリティ事業を支えているのは「障がいのある人向けの取組は、すべての人のためになる」という基本的な考え方である。この考えに基づき、アクセス展では、障がいのある人のニーズに応えるために開発された教材や鑑賞プログラムを、障がいの有無にかかわらず、すべての人が利用できるようにした。したがって、触地図や立体コピーをいわゆる「健常者」がさわることも可能であり、誰もがさわれる彫刻作品も展示した。障がいのある当事者だけでなく、すべての来館者が体験できる鑑賞プログラムを目指した背景には、次の二つのきっかけがあった。

一つ目は、2016年度に、知的障がいのある児童生徒が通う特別支援学校で所蔵品の移動展示を行った時のこと。学校から「作品の認知のため、視覚だけでなく触覚も使って作品を鑑賞したい」というリクエストを受け、保存担当学芸員をはじめとする同僚の協力を得て、作品の固定方法等を検討した。当日、現場で目の当たりにしたのは、触覚の活用が文字通り鑑賞者と作品をつなぎ、能動的で充実した体験を促進できるということ。美術作品の触察は、あくまで目の見えない人の鑑賞の権利を保障するものだという先入観があったが、知的障がいや発達障がいのある人にも大いに有効だということを実感した。大きな可能性を秘めた触察を、いつかすべての人が体験できる機会を設けられないだろうか、という考えが漠然と頭の中に芽生えたのは、この時である。

二つ目の契機は、私自身が2019年に文化庁の在外派遣研修で米国に滞在した時に訪れた。米ニューヨークのミュージアムでは、さわれる教材は目の見えない／見えにくい人向けのプログラムに限らず、例えば自閉スペクトラム症や認知症のある人向けのプログラムでも活用されていた。プログラムを進行するエデュケーターの多くが、さまざまな障がいのある人向けのワークショップを担当しており、経験や知識は有機的かつ合理的に応用されていく。五感の活用はアクセス・プログラム（＝主に障がいのある人向けのプログラム）で最も重視されるアクティビティの一つだが、派遣期間中には、障がいのある人のみならず、教員を対象とした研修にも多感覚の活動を採り入れるための検討が行われていた。アクセス・プログラムの持つ潜在力は、より広い対象のプログラム開発にも活用できるのではないか、と期待が膨らんだ。

対象の拡大には、他にも利点がある。例えば、目の見えない人が晴眼の友人や家族を同伴して来館したとする。触察できる人を当事者に限定すると、彼らは作品をさわる体験を共有できないかもしれない。さらに、今回の展覧会で対象の拡大にこだわった背景には、対象を限定すると「関係者」しか関心を持たないのではないかという危惧もあった。プログラムに参加できる対象を可能な限り広げ、誰もが「自分事」として楽しめる機会の提供が、最も理想的な形ではないだろうか。

そうはいっても、アクセス展の開幕直前には感染が拡大しており、やはり触察できる人を目の見えない／見えにくい人に限定すべきか、触察できる日時を限定すべきかという議論も館内で行われた。アルコール消毒できないブロンズ作品を不特定多数の人がさわることは、感染防止の観点からすれば、決して推奨されることではない。それでも、誰もがいつでもさわれる機会の確保に意義を見出し、検温・消毒の徹底や手袋の設置等の対策を考え、希望者ができるだけ安心して触察プログラムに参加できるよう準備を進めた。

2．検証――対象は広がったか？

このようなプロセスを経て実現した、すべての来館者への触察機会の提供は、視覚に障がいのある人に限らず、晴眼者や、視覚以外の障がいを持つ来館者からも好評を得ることができたため、一定の成果はあったと言えるだろう。1月に筆者が聴講したシンポジウムにおいても、やはり知的障がい、発達障がいのある当事者にとって、さわれるものがあることは非常に重要、と複数のパネリストが口を揃えていた＊1。柳原義達記念館という彫刻展示室を備える当館にとって、触察を含む彫刻の新しい鑑賞プログラムの検討は今後も継続する意義があると思われる。

また、1980年代に開館した当館では、現在も企画展は全事業の筆頭に挙げられ、すべてのスタッフが関わる全館的な事業である。つまり、スタッフ全員にとっても自ずとそれが「自分事」となる。開幕時には障がいのある人の作品鑑賞に立ち会ったことがないスタッフもいたが、関連プログラムの運営や触察の立会等を経て、多くのスタッフが経験を積むことができた。来館者はどうだろうか。来館者数は目標人数を大きく下回った上に、関係者然とした来場者の割合がいかに高かったか、監視スタッフのアンケートを見るとよく分かる（9ページ）。一部には、テーマを知らずに来館して美術の可能性を感じたという声もあったが、やはり小規模な所蔵品展だけではなく、多くの人が足を運ぶ展覧会においても当たり前にアクセシブルな展示を試みることが、共生社会推進のためには重要であるだろう。

3．課題――時間・空間を広げる

企画展は、会期中には全館的事業となる一方、一時的な事業でもある。展覧会閉幕から半年経った今痛感しているのは、アクセス向上の取組を継続する難しさである。会期中にも本事業の実行委員から、この取組をいかに継続させるか、という課題が挙げられていた。事業予算の大半をアクセス展で執行してしまったこともあり、下半期に同じペースで事業を企画運営することはできなかったが、感染拡大が落ち着いた秋には久々に他館での実地調査も叶った。また、冬には地域の認知症のある当事者や家族から話を伺う機会も得られ、今後の進むべき道や課題が明確化してきたように思う。

事業数こそ限られていたが、下半期の一番の成果は、当館としてはじめて、講演会のアーカイブ映像を字幕付で公開したことである。ここ2年の間、企画したイベントの中止や定員削減、参加自粛の呼びかけをするたびに、それぞれの担当者は苦汁をなめてきた。髙曽学芸員が

取り組んだ2時間弱の講演会の文字起こしと映像編集の作業は、コロナ禍により講演会への参加を断念した人だけでなく、私たちが現時点では想像が及んでいない人たちにも広く利便性を提供できるのではないか、と期待している。

また、アクセス展会期中に担当者自身も気になりつつ解決できなかった課題として、アクセス向上を実践している場所が企画展示室という区画に限定されてしまったことが挙げられる。当館には階の異なる入口が二つあり、館内の構造が分かりにくいという指摘をたびたび受ける。会期中も企画展示室の外で、一部の来館者には不便を強いており、監視スタッフからも、館内設備の分かりやすい案内があると良いのではという提案が挙がっていた。

狭い視野で事業の企画や運営をしていると、どうしても参加者のその場、その時の活動にしか考えが及ばないが、「美術館体験」は複層的なものであり、決して会場内では完結しない。今後はより広い視野のもと、利用しづらさを感じるさまざまな人の意見を伺いながら、展示室の外の環境も整備する必要を感じている。

4. レガシー

入場者数という数字だけを見れば、アクセス展は明らかに失敗に終わっている。報告書の編集作業の過程で、来館者や参加者から寄せられたさまざまなメッセージを読み返しながら、この展覧会をどのように評価すべきか頭を抱えていた。そのようなときに偶然参加した講演会で事業評価に話が及んだ際、「参加者の体験や感想じたいに、いかに価値を付与できるか、意味を持たせることができるかが重要」という旨の発言があり、目を開かれる思いがした＊2。自分には果たしてそのような視点があっただろうか。事業の正当性を確認するために、都合の良い解釈や引用をしていなかっただろうか。今回、来館者や参加者からアンケートを通していただいた多くの意見や感想もまた、小田久美子さんの言葉を借りれば、当館にとっての大きな「財産」だ（11ページ）。そして、所蔵品やそれにまつわる教材を展示したアクセス展では、言わずもがな、当館のコレクションが結節点となって、多くの人をつないだと言えるだろう。これらの財産は今後も当館に残るものであり、次の行き先を示す道標でもある。遠方に足を運ぶ調査が叶わない今を、集めた財産に真摯に向き合う好機と捉えたいと思う。

＊1 2022年1月20日（木）の古代体験研究フォーラム2021「知的障がい・発達障がいのある子どもも楽しめるワークショップデザイン」（主催：兵庫県立考古博物館）にて

＊2 2022年2月6日（日）の公開レクチャー「アート×美術館×自閉症：イタリアの事例より」（主催：文化庁、一般社団法人アーツアライブ）のクリスティーナ・ブッチ氏の講演より

■謝辞

令和3年度の事業を実施するにあたり多大なご協力をいただいた関係諸機関、関係者の方々、およびここにお名前を記すことを控えさせていただいた方々、これまでの事業でお世話になった方々に深く感謝の意を表します。（敬称略）

三重県視覚障害者支援センター　視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ
宮田雪乃　金光男　小田久美子　道田健　林容子

公益社団法人認知症の人と家族の会三重県支部
石﨑三佳子　亀井幸子　木下知威　楠麻耶　桑田知明　小阪圭一　﨑田明香　下栄子　竹内利夫　田代亜矢子　長井健　中村千恵　広瀬浩二郎　藤川悠　松原豊　大和慎

・掲載したインターネットリソースの最終アクセス日（11ページをのぞく）は2022年2月20日。今後アドレス変更やページ更新に伴い、リンク切れになる可能性もある。
・障がいの害／がいの表記は三重県の方針に基づき「障がい」で統一した。
https://www.pref.mie.lg.jp/KENKIKA/SOGOH/23460023167.htm

令和3年度　文化庁　地域と共働した博物館創造活動支援事業
美術館のアクセシビリティ向上推進事業　報告書
執筆・編集：鈴村麻里子、村上敬、橋本三奈　＊引用でない無記名の文章は鈴村が執筆
写真撮影：松原豊（13、18ページをのぞく）、小阪圭一（13ページ）
デザイン・印刷：株式会社アイブレーン
発行日：2022年3月30日
発行者：美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会（三重県立美術館内）
〒514-0007　三重県津市大谷町11番地
TEL. 059-227-2100（代表）
FAX. 059-223-0070
E-mail: bijutsu2@pref.mie.lg.jp
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/
©2021美術館のアクセシビリティ向上推進事業実行委員会
無断転載・複製禁止

報告書オンライン版URL
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000259820.htm